

例題でわかる データ処理

Webアプリケーションに欠かせない処理法を徹底伝授

第2回

RDBデータとXMLデータの更新

PROJECT KySS ● <http://www.PROJECTKySS.NET/>

Technology Tools

- Visual Basic .NET
- Visual C# .NET
- SQL Server 2000
- Oracle 9i
- Access 2002
- ASP.NET
- Internet Information Services
- Other:
 - XML
 - Access 2003

Level



Samples

・この記事で取り上げたソースコードおよびサンプルプログラムは、付録CD-ROMの¥DOTNET¥WEB¥dotNetMagazineディレクトリに収録しています。

¥DATA

サンプルで利用しているデータ

¥SQLUPDATE

SQL Serverデータを更新するサンプル

必要不可欠な機能

第一回目の前回は、既存のSQL ServerデータベースをXMLデータに変換して保存する方法、そして逆にXMLデータをSQL Serverデータベースとして登録する方法を紹介しました。しかし実際には、既存のデータを変更することなく運用することはありえません。そこで、今回は、「データの更新」について見ていきましょう。

まずSQL Serverデータを表示し、さらにXMLデータも表示して、最後に両方の更新処理を実行します。これらの処理は同一フォーム上で実現しますが、各々の処理を分け、段階を追って練習していきます。



SQL Serverデータを編集可能な形で表示する

まずは、SQL Serverデータの表示からです。今回使用するデータは、前回、Access 2003で「Microsoft SQL Serverデータベースウィザード」を使い、MDBデータから作成したproductData.adp (図1)です。すでに「productDataSQL」というデータベース名でSQL Serverに登録されていますね^[注1]。

このデータはDataGridコントロールにバインドして、表形式で表示します。表の中にはデータを編集するためのボタンを付けておきます。そして図2のように、ボタンクリックにより、「単価」フィールドのデータを編集/更新できるようにしてみましょう。

注1) Access 2003のMDBデータをSQL Serverにストアする手順については、前号を参照してください。付録CD-ROMのサンプルのdataフォルダには、MDBファイル (productData.mdb) を再収録しています。今回初めて本連載を読まれる方は、このファイルをもとに、「productDataSQL」というデータベース名のSQL Serverデータベースを作成してください。

図1：今回も使用するSQL Serverデータベース

品番	品名	単価	仕入先
DPC-MM111	ポータブルCDプレーヤー	9980	A社
SAD-2222	ステレオCDシステム	8800	B社
NV-3333	ハイファイビデオデッキ	9800	C社
EC4444	ハイパワークリーナー	15800	D社
BW-5555	食器洗い乾燥機	39800	E社

●データを表形式で表示するための設定

さっそく、データを表示する表を用意し、その中に [編集] ボタンを付けていきましょう。Visual Studio .NET 2003 (以下VS.NET) を起動し、ASP.NET Webアプリケーションを作成してください。この例では、プロジェクト名を「sqlUpdate」とします (プログラムはWebForm1.aspx.vb)。

そしてDataGridコントロールを、ツールボックスから、フォーム上にドラッグ&ドロップします。また、プロパティウィンドウでDataGridの「AutoGenerateColumns」プロパティを“False”に指定しておきます。

AutoGenerateColumns プロパティ ————— Note

DataGridの列の定義は手動で行なうため、列の自動生成を禁止しておく必要があります。“True”のままでは、プロパティビルダで定義した列と、自動的に生成された列が重複して表示されてしまいます。

続いて、表の項目名を決めたり、[編集] ボタンを付けるなどの定義を行ないます。「プロパティビルダ」(図3) から「DataGrid1プロパティ」ダイアログボックスを表示し、「列」メニューを選択して、「列一覧」を表示します。

先にヘッダを設定していきましょう。「使用可能な列」から“連結列”を選択して [>] ボタンをクリックすると「選択された列」内に「連結列」が追加され、「Bound Column」プロパティが表示されます。このプロパティに、図1のデータベースにある各項目名を設定していきます。たとえば、図4のように、「ヘッダーテキスト」に“品番”、「データフィールド」に“品番”と入力すると、「選択された列」内の文字が“品番”に変わります。順次“連結列”を選択して [>] ボタンをクリックしながら、「品名」

図2：[編集] ボタンのクリックで、「単価」を編集できるようにする

	品番	品名	単価	仕入先
編集	DPC-MM111	ポータブルCDプレーヤー	9980	A社
更新	SAD-2222	ステレオCDシステム	8800	B社
編集	NV-3333	ハイファイビデオデッキ	9800	C社
編集	EC4444	ハイパワークリーナー	15800	D社
編集	BW-5555	食器洗い乾燥機	39800	E社

「単価」「仕入先」の項目を設定してください。

すべての列を指定できたら [適用] ボタンをクリックしてください。DataGridが図5のように表示されるはずですが。

データフィールドに指定する項目名 ————— Note

データフィールドに指定する項目名は、プログラム内でDataColumnオブジェクトに指定する項目名と同じにします (詳細は後述)。たとえば、データフィールドに「単価」ではなく「価格」と指定したなら、プログラム内のDataColumnオブジェクトにも「価格」と指定する必要があります。

図3：プロパティビルダで各列の定義を行なう

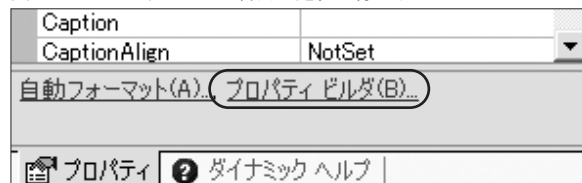


図4：「品番」列が追加された

